

今月の ESD のひろばでは「子どものちから」について皆さんと考えていきたいと思います。

よい時間

ある朝のことです。幼児クラスの先生が「A ちゃんがお散歩に行きたくない、って言ってるんですけどどうしましょう？」と相談に来ました。その子を見ると「行きたくない！」を身体じゅうで表現しています。私も先生も考えていることは同じで「この子の想いを尊重してあげるのがよいか。」それとも、「ここで聞いてあげるとこれから先もいけなくなるではないか。」ということです。そしてその子の最近の園での様子や、お家での状況を考えて、まずは行きたくなるようにお話しをしてみようと思いました。

エントランスではすでに子ども達が出発の準備をして待っています。待機していた先生も「もう待てなくなってます。」と呼びにきました。私が A ちゃんに色々とお話しをしても一向に状況は変わりません。

そこで A ちゃんをひとまずエントランスに連れて行って、待っている子ども達に言いました。「ねえ、みんな、A ちゃんがお散歩にいきたくないんだって。どうする？」と聞きました。すると年長さんの女の子 3 人と目が合ったので「ねえ、ちょっと助けてくれない。」とお願いをしました。すると 3 人が A ちゃんに寄り添い話を始めました。始めは乗り気でなかった A ちゃんも、段々と「じゃあ靴下はかせて」と言い、お話しをしてくれた女の子と手をつないで散歩に行くことになりました。私はこのやりとりを見て考えさせられました。お散歩に行きたくないでぐずっている子どもがいたら、他の子ども達も待ちきれなくなるし、お散歩に行く時間もなくなってくる、と大人はあせってしまいます。

でもそれは、予定通りにことを運ぼうとするからなのです。ぐずっているその子にもぐずる事情があります。だから、そんな時間も子ども達と一緒に経験すれば、それはもう待っている子にとっても、ぐずっている子にとってもよい体験になるということです。大人がはじめから「暮らしの中の出来事を子ども達と一緒に体験しよう」と覚悟をしておけば、つまづきが起きても、その出来事自体が子どもとの『よい時間』にできるかも知れません。



子どものちからを信じる

最近一人の女の子が沈んだ表情でアトリエの壁に向かっていました。ケガをした様子もないし、理由を聞いても返事はありません。私は近くで遊んでいた子ども達を集めて聞いてみましたが、何も知らないと言うので「じゃあ、みんなで聞いてみて何かあったら先生に教えてね。」と子ども達にまかせました。離れたところから観ていると、くっついて話を聞く子、その場に座って状況を見守る子と様々です。B ちゃんはしばらく壁を向いたままで、もう何人かの子ども達はその場から離れていったのですが、それでも B ちゃんに語り続ける 1 人の子どもがいました。私はその子の普段からは想像できない姿に接することで、その子の素敵な一面を知ることができたのです。

大人はついつい「自分達がしなければ」といろいろと背負ってしましますが、もっと子どもに託してみませんか？大人の理想にはいかないかも知れませんが、子ども達がもっている本来のちからを見ることができかも知れませんよ。